

小学生時代の自然体験と大学生が抱く自然意識の関係

高木 なつき (生涯スポーツ学科 野外スポーツコース)

指導教員 清水 史郎

キーワード：小学生時代，自然体験，意識

1. 目的

大橋(2007)は、子ども時代の自然と関わる遊び体験は、子どもの豊かな成長に大きな影響を与えていると述べている。

本研究では、小学生時代に経験した自然体験と、現在の大学生が抱く自然意識の関係について明らかにすることを目的とした。

2. 研究方法

B大学に在籍する生涯スポーツ学科の2年生134人を調査対象者とした。小学生時代に経験した自然体験の頻度について小学生時代の自然体験の頻度を4段階(非常に多い、やや多い、やや少ない、非常に少ない)に分け回答を求めた。その中で、非常に多い、やや多いと回答した被調査者70名を自然体験経験者群とし、やや少ない、非常に少ないと回答した被調査者64名を自然体験非経験者とした。

質問紙調査は、山本ら(2004)が作成した「子どもの自然体験活動に関する調査」を参考に、「小学校時代の環境」から3項目、「運動と健康」から2項目、「自然に対する意識」から4項目、「生活習慣」から2項目、「内面的特性」から6項目の合計17項目を用いた。そして、5段階評定による調査用紙を作成し回答を求めた。

3. 結果と考察

項目ごとに有意差検定を行った結果、質問項目の17項目のうち「育った地域に子どもの遊べる自然がたくさんあった」「週末などの小学校が休みの日には、家族の方も休みであることが多かった」「自然の美しさ・偉大さをよく理解している」「自然を大切にすることが強い」「自然に対する興味が高い」の5項目で自然体験経験者の方が、自然体験非経験者に比べ有意

に高い値を示した。それ以外の12項目では、有意な差は見られなかった。

また、「運動と健康」「自然に対する意識」「生活習慣」「内面的特性」「小学校時代の環境」の5因子で自然体験経験者と自然体験非経験者の有意差検定を行った結果、「自然に対する意識」「小学生時代の環境」の2因子で自然体験経験者の方が自然体験非経験者に比べ有意に高い値を示した。つまり、小学生時代に自然体験を多く経験した学生は、経験の少なかった学生よりも、現在の自然に対する意識が高かった。また、小学生時代の環境も自然体験経験者のほうが自然豊かであり、休日に家族が揃っていることが多かった。しかし、「運動と健康」「生活習慣」「内面的特性」の3因子では有意な差は見られなかった。つまり、運動と健康の面や、生活習慣、自身の内面的な性格には、小学生時代の自然体験の経験頻度との関係はなかった。

4. 結論

自然体験経験者は自然体験非経験者よりも小学生時代に自然体験が豊富にできる環境で育った学生が多かった。また、自然体験経験者は、大学生になった現在の自然に対する意識も高い傾向にあるという調査結果を得た。しかし、小学生時代の自然体験の経験と、現在の大学生の内面的な特性や生活習慣との関係性は非常に低い傾向にあった。

引用・参考文献

大橋伸次(2007)保育職志望学生の自然体験学習, 国際学院埼玉短期大学研究紀要, 第28号, pp. 9-18.

山本祐之, 平野吉直, 内田幸一(2005)幼児期に豊富な自然体験活動をした児童に関する研究, 国立オリンピック記念青少年総合センター研究紀要, 第5号, pp. 69-80.